

沖縄県竹富町小浜島・八重山語小浜方言の動詞の活用について

クリストファー デイビス
Christopher Davis (琉球大学)

1 はじめに

本報告は、沖縄県竹富町小浜島の言葉「クモームニ」（以下では「小浜方言」）の研究結果をまとめたものである。去年の報告では、(1) 音素・音声の特徴と音素・音声・カナ表記法、(2) 格助詞及びとりたて助詞の記述、そして(3) 童話「大きなかぶ」のクモームニ版の書き起こしを紹介した。本報告では、去年の報告を背景にしながら、クモームニの動詞の活用に焦点を当てることにする。小浜方言についての背景的な情報や表記法に関しては、去年の報告書を参考されたい。

なお、本報告のデータは、全て小浜島出身／在住で、小浜言葉の話者である大嵩善立氏（S2 生、男性）への面接調査によるものである。大嵩善立氏以外にも、大嵩スエ氏と花城正美氏にたくさんのご協力を頂いた。シカットウカラミーハイユー。

2 動詞の主な活用形とその作り方

このセクションでは、これまでの調査で確認した動詞の活用形とその基本的な用法と例文を紹介する。用例は3行構成で、カナ表記・日本語訳・音声表記で記す。その用例で注目したいところをすべての行で**太文字**で示し、カナ表記の行で下線付き太文字で示す。

小浜方言の音声上の一つの特徴である母音の無声化は、カナ表記では記さないが、音声表記で母音の下に○をつけることで示す。例えば、「行く」は小浜方言で「パル」となるが、「パ」の母音が無声化するため、音声表記ではこれを **p̤aru** と表記する。これまでの研究では、この無声化が完全に予測できるような法則はまだ見つけられず、音韻上の対立を表してる可能性があると思われる。

2.1 現在形

まずは、動詞の現在形（非過去形とも呼ばれる）から始める。この形は基本的に動詞の語幹と接尾辞 **-u** で作り、日本語の現在形とは形上でも意味上でも似ている。しかし、八重山語の他方言と同じく、現在形の最後に接尾辞「ン」（**-n**）が付くこともあり、そのため現在形を二種類（「ン」が付いているものと付いていないもの）にわけなければならない。今の段階では、この二種類の現在形の意味上の違いは不明であるが、「ン」が付いた形はおそらく焦点を表す助詞「トゥ」（**=tu**）や「ンドゥ」（**=ndu**）と基本的には共起しないと思われる。また、これまでの聞き取り調査では、「ン」が付いた現在形が使われる頻度が低いようである。

現在形 1 (「ン」が付いていない形) の用例 :

- (1) ウトゥトー プイトウルイカテイトゥ ヌブ
 弟は 一人で 寝る
 ututoo p^si_ituri=kati=tu nub-u
- (2) ンナカラトゥ シンチミル
 今から 片付ける
 nna=kara=tu jintjimiru

現在形 2 (「ン」が付いた形) の用例 :

- (3) アナワ フルン
 穴を 掘る
 ana=wa φur-un
- (4) キューヤ ブンザーウヤヌ ヤーゲ ワールン
 今日 おじさんが 家に いらっしゃる (来る)
 kyuu=ya bunzaa+uya=nu yaa=ge waar-un

現在形 2 は、上で書いたように焦点を表す助詞「トゥ」や「ンドゥ」とは基本的に共起しないと思われるが、現在形 1 はこれらの焦点助詞の有無にかかわらず使えるようである。次の 2 つの例文では現在形 1 「ヌム」(飲む) が使われているが、片方では目的語に焦点助詞「トゥ」が使われ、もう片方では「ワ」が使われているが、どちらの文でも現在形 1 「ヌム」が使われている。

- (5) ヌンドゥヌ カーリクィタラ ミンツィトウ ヌム
 喉が 乾いてきたら 水を 飲む
 nundu=nu kaari k^si_itara mintsj=tu num-u
- (6) ヌンドゥヌ カーリクィタラ ミンツィワ ヌム
 喉が 乾いてきたら 水を 飲む
 nundu=nu kaari k^si_itara mintsj=wa num-u

例文 (3) では、目的語に「ワ」と動詞の現在形 2 が使われている。このような例文が存在するのに対して、焦点助詞の「トゥ」「ンドゥ」と現在形 2 が同時に使われている例はこれまで確認されていなくて、八重山語の他方言と同じようにおそらく基本的には共起しないと思われる。

2.2 過去形

小浜方言には二種類の過去形が存在し、これらを過去形1と過去形2と呼ぶ。過去形1は、接尾辞「タ」(-ta)で表し、語幹が一種の音便化を示す。また、過去形1の-taの後ろに「ル」(-ru)を伴う形と伴わない形が存在するが、これらの意味上の違いはまだ明確ではない。次の2つの例文では、過去形1の最後に-ruが付いた形と付いていない形がそれぞれ使われているものである。

- (7) ユンボンマー ファイシティ フタキナー ヌフタ
 夕ご飯を 食べて すぐに 寝た
 yunbonmaa φai-f̥i̯ti φɯtakinaa nuφɯ-ta

- (8) ユーネーヤ フターリィカティ ヌフタル
 昨夜は 二人で 寝た
 yuunee=ya φɯtaari=kati nuφɯ-taru

過去形2は、形上では動詞の連用形(2.4で紹介する)に-f̥i̯taをつけることによって作られる。以上の例文の動詞「ヌブ」(寝る)の過去形1「ヌフタ」または「ヌフタル」に対し、過去形2は「ヌビシタ」(nubi-f̥i̯ta)となる。また、「ハル」(行く)の過去形1が「ハッタ」または「ハッタル」となるのに対し、過去形2は「ハリシタ」(h̥ari-f̥i̯ta)となる。

- (9) ヌビシタ
 寝た
 nubi-f̥i̯ta

- (10) ブネートウルィ トウッタラ ファートウルィン トウピ ハリシタ
 親鳥 飛んだら 子鳥も 飛ん いった
 bunee+turi tɯttara φaa+turi=n tɯpi h̥ari-f̥i̯ta

過去形1と過去形2の意味上の違いは、今後の研究が必要であるが、「近い過去」と「遠い過去」の違いが関わる可能性がある。鈴木(2001)の報告では、八重山語石垣方言(四箇方言)の2つの過去形が「普通過去形」と「直前過去形」と名付けられて、それぞれの形が小浜方言の過去形1と過去形2に歴史的に相当するものであると思われる。「寝る」を表す動詞を例にすると、小浜方言ではこの動詞の現在形が「ヌブ」となり、過去形1が「ヌフタ」で、過去形2が「ヌビシタ」となる。石垣方言のこれに相当する動詞の現在形が「ニブ」となり、「普通過去形」(過去形1)が「ニブダ」で、「直前過去形」(過去形2)が「ニビッタ」となる。

このように、小浜方言の「ヌフタ」と「ヌビシタ」がそれぞれ石垣方言の「ニブダ」と「ニビッタ」に歴史的に相当すると思われるが、用法・意味上の使い分けが同じかどうかはまだ明確ではない。鈴木(2001)によれば、石垣方言の直前過去形は以下のような特徴

がある。

「直前過去形は、主として、現在に関係のある、すでに実現したことを表す特別な過去形である。直前過去形には、思い起こし、発見、気付きのようなニュアンスがともなうことがある。」(鈴木 2001 : 27-28)

これまでの調査では、小浜方言の過去形2の例文もこのようなニュアンスがともなうように思われるものは少なくない。常に「直前」の出来事だけを表すかどうかは、今後の研究が必要であるが。これまでの調査で過去形1が使えるのに対し過去形2が使えないと指摘された例文は確認できている。次の例文では、述語「行った」を表すためには過去形1「ハッター」は使えるのに対して過去形2「ハリシタ」は使えないようである。

- (11) バーヤ キューヤ ハイシャ ウキシティ ハタキング ハッター
 私は 今日 早く 起きて 畑に 行った
 baa=ya kyuu=ya haija uki-fiiti hataki=ne **hāt-taru**

これまでの調査では、過去形1は過去形2より使われる頻度が多く、おそらく過去形2は鈴木等が主張するように「特別な過去形」であろうが、その詳細は今後の課題としてのこす。

2.3 否定形

動詞の否定形は、「現在否定形」と「過去否定形」の二種類が存在する。以下の例文では、動詞「ウルル」(降りる)でその2つの形を示す。

現在否定形「ウルヌ」:

- (12) ンガタレー タローン ウルヌ
 ここでは 誰も 降りない
 ngataree taroo=n **ur-unu**

過去否定形「ウルナタ」:

- (13) キューヤ ガッコヌ マイタンガタリ ウルナタ
 今日 学校の 前で 降りなかった
 kyuu=ya gakkoo=nu maitangatari **ur-unata**

動詞の現在否定形は、以下の例文のように動詞の語幹に -anu または -unu をつけることによって表す。

- (14) ブナラー プイトウルイカテー ヌバナ
 妹は 一人では 寝ない
 bunaraa p̄ituri=katee **nub-anu**

- (15) オーマヌ ミーヤ ウトウヌ
 熱しない 実は 落ちない
 oom-anu mii=ya **ut-unu**

この形は、動詞の未然形 (-a または -u で終わる形) と接尾辞 -nu に分析することができる。未然形が -a で作られるか -u で作られるかは、動詞の活用グループによるものであり、i 語幹グループは -u で作り、他のグループは -a で作る (詳細はセクション3を参考されたい)。未然形に「ヌ」をつけると現在否定形ができ、「ナタ」をつけると過去否定形ができる。

さら細かく分析すると、接尾辞 -nu は否定接尾辞 -n と現在接尾辞 -u に分析することもできる。それで、過去否定形は、その現在接尾辞 -u の代わりに過去接尾辞 -ata をつけることで作られるのである。上の例では、現在否定形「ウルヌ」に対して過去否定形が「ウルナタ」となっている。これと同じように、例えば「売らない」は現在否定形「カーハヌ」(kaahanu) で表すのに対して、「売らなかった」は過去否定形「カーハナタ」(kaahanata) で表すことになる。

- (16) キューヤ イサカハーリキ カーハナタ
 今日 少ないので 売らなかった
 kyuu=ya isakahaariki **kaah-anata**

2.4 連用形

動詞の連用形は、形上では動詞の語幹と接尾辞 -i で作る。名前の通り、連用形は節と節をつなげる用法があり、また様々な助動詞を伴う用法もある。さらに、上で紹介した「現在形」と同じような意味で文末動詞として使われる用法もある。これらの用法を示す例文を簡単に紹介する。

まず、連用形が上で紹介した現在形と同じような意味で使われる例から紹介しよう。以下の例文は、どちらも日本語の「漕ぐ」の現在形の訳文であるが、前者では現在形「コー」(koo) が使われ、後者では同じ動詞の連用形「クイ」(kui) が使われている。

現在形「コー」の例：

- (17) ビキンドウンドウ フネー コー
 男が 船を 漕ぐ
 bikindu=ndu ɸynee **koo**

連用形現在用法「クイ」の例：

- (18) ビキンドゥンドゥ フニ クイ
 男が 船を 漕ぐ
 bikindu=ndu φ̣uni kui

これまでの調査では、動詞の「原形」（日本語の現在形）を聞くと、連用形が頻繁にその訳として現れる。以上のような用法からわかるように、現在形と同じような意味で使われるようであるが、この2つの形の意味上の違いがどこにあるのかは今後の課題にしたい。

次に紹介する例文は、節と節をつなげる用法の例である。

- (17) カヌ スィトー フニ クイ スィマンゲ バタリ クィタル
 あの 人は 船を 漕いで 島に 渡って きた
 kãnu s̃ĩtoo φ̣uni kui s̃ĩma=nge batari k̃ĩ-taru

この例文では、連用形「クイ」が日本語の「漕いで」に相当する用法で、前節と後節をつなげる形である。

節と節をつなげる用法と同じように、連用形は本動詞と助動詞をつなげる形としても使われる。上の例文の文末動詞でもこの用法が見られ、「バタリ」が「渡る」の連用形で、「クィタル」が「来た」を意味する助動詞である。次の例では、「漕いでみよう」の意味を表すため、本動詞の連用形「クイ」に助動詞「ミラ」（みよう）が付いた形が使われている。

- (19) ムールカティ フニ クイ ミラ
 みんなで 船を 漕いで みよう
 muuru=kati φ̣uni kui mira

以上で説明したように、連用形は3つの用法がある。これに加えて、他の様々な活用形を作るために、連用形に接尾辞をつけて作る形がいくつか存在する。2.2で紹介した「過去形2」もその一つの例である。この形は、動詞の連用形に「シタ」(-ʃĩta)をつけることで作る形であるが、これと同じように以下で紹介する「接続形」も「進行形」も連用形に接尾辞をつけることによって作られる形である。

2.5 接続形

接続形は連用形に接尾辞「シティ」(-ʃĩti)をつけることで作る形である。接続形の一つの用法は、節と節をつなげて、その節と節の時間軸上の「順番」を表すものである。つまり、節1の動詞を接続形にすると、節1が描写している出来事が起こってから節2の出来事が起こる、という時間の関係を表すものである。

- (20) クジンガ ヌビシティ ハチジンガ ウキタル
 9時に 寝て 8時に 起きた
 kudzi=nga **nubi-f̥iti** hatfidzi=nga uki-taru

しかし、接続形が常にこのような時間的な順番を表すわけではない。例えば、次の例では「着る」順番が表されているわけではなく、「私」が着た服の色と「妹」が着た服の色を対比するために接続形が用いられている。

- (21) バーヤ アカクィヌワ キシシティ ブナロー アオイル クィヌトゥ クィスィタル
 私は 赤い服を 着て 妹は 青い 服を 着た
 baa=ya aka+k̥̆nu=wa **k̥̆si-f̥̆iti** bunaroo aoiru k̥̆nu=tu k̥̆si-taru

以上のような用法は、連用形にもあるが、接続形は連用形と違って、助動詞を伴う用法や文末で使われ「現在」の意味を表す用法はないようである。また、接続形は上で紹介した「過去形 2」と形上で非常に似ているため、おそらく歴史的にはこの 2 つの形は関係があると思われるが、その関係はまだ不明である。

接続形は以上で説明したように基本的に動詞の連用形に「シティ」をつけて作られるが、次の例文のように「シティ」の「ティ」が抜けて「シ」だけでできている接続形も観察されている。

- (22) クィヌ ツィカナイル スィトゥワ キリシ ピンキ ハツタル
 昨日 (馬が) 養っている 人を 蹴って 逃げて 行った
 k̥̥̆nu ts̥̥̆kana-iru s̥̥̆tu=wa **k̥̥̆ri-fi** p̥̥̆nki h̥̥̆at-taru

「シティ」で終わる接続形と「シ」で終わる接続形の違いは今後の課題として残すが、後者はこれまでの調査で確認できた用例は上のものだけであり、「シティ」で終わる形より使われる頻度が低いようである。

2.6 進行形

「進行形」として考えられる形には、いくつかの形が確認されている。1つ目は、「現在進行形」と呼ぶことにし、形上では連用形に「ル」(-ru)をつけることで作られる形である。日本語の「～している」と同様に、ある行動が現在行われている最中にあるという意味を表す用法がある。

- (23) ウレー ビーシティ ヌビル
 彼は 酔っ払って 寝ている
 uree bii-f̥̆iti **nub-iru**

- (24) オキヤクサマー ビリシティ マールムヌワ ファイル
 お客様は 座って ごちそうを 食べている
 okyakusamaa biri-ŋiti maarumunu=wa **ɸa-iru**

また、日本語の「～している」と同様に、動詞によってはその行動の結果が現在に残っているという意味を表す用法もある。

- (25) ヌーンディトゥ ウヌ キーヌ パーヤ ウティル カヤー
 なんて その 木の 葉は 落ちている かな
 nuundi=tu unu kii=nu paa=ya **ut-iru** kayaa

i 語幹動詞（セクション3 参考）は、現在進行形と現在形が同じ形であり、上の例文の「ウティル」はこの例では意味から考えて現在進行形であることがわかるが、現在形も「ウティル」となるのである。この現象は、八重山語の他方言でも観察できる。

現在進行形は、八重山語の他方言を考慮すると、おそらく動詞の連用形+助動詞「ウル」からできた形であると思われるが、連用形+ウルの形自体はまだ小浜方言では未確認である。しかし、「過去進行」を表すためには、以下の例にあるように、動詞の連用形「フィー」（降って）+助動詞「ウッタ」（いた）という形が存在する（この例では、本動詞の連用形に焦点助詞「トゥ」が付き、助動詞「ウル」が過去形1で現れている）。

- (26) クィヌヤ アメー フィートゥ ウツタル
 昨日は 雨は 降って いた
 k̄inu=ya amee **ɸii=tu** **ut-taru**

連用形+ルで作る現在進行形の他に、連用形+タルで作る形も以下の例で示すように存在する。

- (27) ウトゥトー ミナマー ヌビタル
 弟は 今 寝ている
 ututoo minamaa **nub-itaru**

この例文で使われている「ヌビタル」は、上の例文（23）の「ヌビル」と同じような解釈であり、どちらの例文も日本語の「寝ている」の訳である。よって、例文（27）の「ヌビタル」のような形も一種の「現在進行形」であろうが、これまでの調査ではこの形はまだ十分確認されていなくて、今後の研究の課題として残す。

2.7 完了形

完了形とは、動詞の語幹に接尾辞 **-een** または **-eeru** をつけた形である。日本語の「～してある」形に相当すると思われるものであり、母語話者がこの形が使われる例文を日本

語に訳すときには「～してある」と訳すことが多い。ちなみに、ここでいう「～してある」形は、日本語共通語のそれとは用法が違い、沖縄県で広く使われているものである。これまでの調査ではこの形はまだ十分に確認できていないため、細かい分析を今後の課題として残す。一つだけ書いておくべきこととして、日本語の過去形が使われるところでは、この「完了形」が使われることがある。以下の例文もそういうものである。

(28) ウスインドウ ミームヌ ナヘール
牛が メスを 産んである
usi=ndu mii+munu **nah-eeru**

(29) パイワ フンミ カゴンゲ イレール
足を 縛って かごに 入れてある
pai=wa funmi kago=nge **ir-eeru**

以上の例文では、完了形が「過去に起きた出来事の結果が現在にも継続している」というニュアンスを表し、そこで「結果形」というラベルでも相応しいのかもしれない。「結果が現在にも継続している」という意味があり、この形は強いて言えば「現在完了形」と呼ぶべきである。これに対立する「過去完了形」も確認されている。過去完了形は、語幹に接尾辞 **-eeta** をつけた形であり、これまでの調査で確認できているのは以下の例だけである（協力者自身がこの形を「来てあった」と訳している）。

(30) オー イキシティヤ イツイワ トゥリ ケータ
はい (海に) 行って 魚を とって 来てあった (来た)
oo iki-f̥ʲiti=ya itsi=wa t̥ʲuri **k-eeta**

2.8 命令形・禁止形・志向形

命令形は連用形と同じように語幹に接尾辞 **-i** で作られる。また、その後ろに終助詞「ワ」(=**waa**) を伴うことが多い。

(31) フチリ ヌミシティ パイシャ ヌビワー
薬を 飲んで 早く 寝ろ
φ̥ʉʲfiri numi-f̥ʲiti paiʃa **nub-i=waa**

(32) ウヌ キーワ キシワー
その 木を 切れ
unu kii=wa **kij-i=waa**

- (33) ウレーヤ シテイリ
 それは 捨てる
 uree=ya ʃiti-ri

ここでいう「命令形」は日本語の「～しろ」形で訳したが、それと全く同じような使い方ではないと思われる。例えば、丁寧な命令文を作るために、本動詞の連用形に尊敬助動詞「ワール」の命令形「ワーリ」をつけることができるようである。

- (34) ウワン ザブトンガ ビリ ワーリワー
 あなたも 座布団に 座って なされ
 uwa=n zabuton=ga **bir-i** **waa-ri=waa**

志向形は、語幹に **-a** をつけて作られる形である。多くの動詞では、この形が現在否定形の最後の「ヌ」をとった形（つまり未然形）と同じ形で作られる。例えば、「イク」（行く）の現在否定形は「イカヌ」であり、志向形が「イカ」である。しかし、**i** 語幹ではこれらの形が異なるようである。例えば、「ウルル」（降りる）の否定形は例文（12）のように「ウルヌ」となるが、志向形が「ウリラ」となる。

- (35) ファイムノー ムチ インゲ イカ
 食べ物を 持って 海に 行こう
 fai+munoo mutʃ-i in=ge **ik-a**

- (36) ディー ウリラ
 さあ 降りよう
 dii **uri-ra**

志向形の意味は、話者だけの志向を表す方法（37）と、聞き手と一緒に行動を促す方法（38）がある。志向形の後ろに、終助詞「ナー」が伴うこともある。

- (37) ミナマカラ バヌタンガーカティ フニ クイ ハラナー
 今から 私だけで 船を 漕いで 行こうね
 minama=kara banu=tangaa=kati ʃuni kui **hara=naa**

- (38) ムールカティ フニ クイ ミラ
 みんなで 船を 漕いで みよう
 muuru=kati ʃuni ku-i **mi-ra**

禁止形は、語幹に **-una** をつけて作られる形である。これまでの調査ではまだ用例が少なく、例文を紹介するだけにし、これ以上細かい分析は今後の課題として残すが、一つだけ記録すべきところは、禁止形は現在形+ナではないようである。「捨てる」は小浜方言で

は現在形は「シティル」となるはずであるが、その禁止形が「ストゥナ」(sɯtuna) となり、禁止形は常に現在形と似た形で現れるわけでないようである。

- (39) クポーリヤッサリキ カタチカテー ムツナ
 こぼれやすいので 片手では 持つな
 kɯpoori-yassar-iki kɯta+tʃi=katee **mutʃ-ɯna**

- (40) ウレーヤ ストゥナー
 それは 捨てるな
 uree=ya **sɯtuna**

3 動詞の活用グループ

上のセクションでは、これまでの調査で確認できた動詞の主な活用形を紹介した。このセクションでは、これらの活用形の音声上の問題を簡単に紹介する。つまり、ある動詞を上で紹介した形に活用したときに、その動詞の語幹がどう変化するのか、接尾辞との関係が音声上でどう現れるのか、という問題である。八重山語の他方言と同じように、動詞の活用形の現れ方は、基本的にその動詞の語幹の最後の音によって決まるものである。よって、動詞を語幹の最後の音で分別し、「〇〇語幹」というラベルでグループに分ける。例えば、「b 語幹」動詞は、語幹が子音「b」で終わるものであり、以上の例文で見てきた「ヌブ」(寝る) がその一つの例である。この動詞の主な活用形を次のようにまとめられる。

現在形	過去形 1	現在否定形	連用形
ヌブ nub-u	ヌフタ(ル) nuɸ-ɯta	ヌバナ nub-anu	ヌビ nub-i

この4つの活用形以外の多くの形は、これらの形から予測できると思われる。例えば、現在否定形の最後の「ヌ」をとって「ナタ」をつけると過去否定形になる。上の動詞を例にすると、現在否定形「ヌバナ」の「ヌ」をとった形に「ナタ」をつけると「ヌバナタ」となり、これで過去否定形の形が計算される。連用形からは、上でも説明したように、過去形2・接続形・進行形・命令形が計算できる。よって、一つの動詞のこれまで紹介した活用形を予測するために、まずはこの4つの形を確認すればいいのである。(以上で紹介した「完了形」は、これまでの調査ではまだ数が少ないため、今回の話から外す。おそらく、連用形で使われる語幹と同じ語幹に **-een** または **-eeru** をつけることによって作られる形であると思われるが、今後の研究で確認する必要がある。志向形や禁止形も、まだ用例が少ないため、今後の課題として残す。)

以下では、活用グループ(語幹グループ)別でこれまで確認できた動詞の形をこの4つの活用形に絞ってテーブルで紹介し、テーブルの下でその語幹グループの注意点を簡単にまとめた。なお、これまでの調査で確認されていない動詞の活用形が多く、今後の研究で

これら未確認の形を確認する必要がある。また、今後の調査で以下で反映されていない活用グループが確認される可能性もある。特に、「死ぬ」に相当する動詞は以下のテーブルでは反映されず、おそらく n 語幹動詞として以下のグループとは違うパターンを示されると思われる。テーブルの空となっているところは未確認の形で、(括弧) で囲まれたものは、それがあある形となない形が両方確認されているものである。

3.1 b 語幹動詞と p 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
b 語幹					
nub	寝る	ヌブ	ヌフタ(ル)	ヌバナ	ヌビ
		nubu	nuɸɯta(ru)	nubanu	nubi
kab	かぶる	カブ	カフタ(ル)	カバナ	カビ
		kabu	kaɸɯta(ru)	kabanu	kabi
p 語幹					
tɯp	飛ぶ	トゥプ	トゥッタ	トゥパヌ	トゥピ
		tɯpu	tɯtta	tɯpanu	tɯpi
asɯp	遊ぶ	アスプ	アスツタル	アスパヌ	アスピ
		asɯpu	asɯttaru	asɯpanu	asɯpi

b 語幹動詞の活用例を見ると、過去形 1 で音便化が生じて、本来の語幹の最後の b が ɸ となっている。p 語幹動詞は、歴史的には b 語幹動詞であり、八重山語の他方言では今でも b 語幹動詞として活用される。p 語幹動詞の由来は、小浜方言の一つの特徴である無声化にある。これまでの調査で確認した動詞では、「トゥプ」(飛ぶ)と「アスプ」(遊ぶ)が p 語幹動詞であるが、「トゥプ」は歴史的には「トゥブ」から変化したもので、「アスプ」は「アサブ」から変化したものであろう。その変化は、「トゥブ」の場合は、tubu の無声子音 t の後の u が無声化し、さらにその次の有声子音が無声化し、結果的に tɯpu となったものであろう。「アスプ」も、同様 asubu から asɯpu となったものであろう。p 語幹動詞は、b 語幹動詞と同様、過去形 1 では音便化が生じるが、その形が異なり、p が t と変化した形で現れるようである。b 語幹の他に p 語幹が別の活用グループとして成立していることが、八重山語の中でも小浜方言の一つの特徴である。

3.2 k 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
k 語幹					
ik	行く	イク		イカヌ	
		iku		ikanu	
aruk	歩く				アルキ aruki

	現在	過去 1	現在否定	連用
ɸuk	吹く			フキ ɸuki
sɨk	聞く		スイカヌ sɨkanu	

これまでの調査では、k 語幹動詞の過去形 1 はまだ未確認であり、今後の調査で確認する必要がある。それ以外の形は、予測どおりのものとなっている。

3.3 ts 語幹動詞

	現在	過去 1	現在否定	連用	
ts 語幹					
muts	持つ	ムツ mutsu	ムツィタル mutsɨtaru	ムツァヌ mutsanu	ムチ mutɨi

ts 語幹動詞は、これまでの調査では「ムツ」(持つ) だけである。ts 語幹であり、t 語幹でないことは、否定形から明らかである。日本語の「持つ」と同じように t 語幹だったとしたら、現在否定形が「ムタヌ」(mutanu) となるはずであるが、実際には「ムツヌ」(mutsanu) である。どの形にしても語幹が ts で終わり、よって「ts 語幹」であると判断できる。連用形の mutɨi は、s が i の前で常に生じる口蓋化である。

3.4 h/s 語幹動詞

	現在	過去 1	現在否定	連用	
h/s 語幹					
kaah	売る	カーフ kaaɸu	カースイタ kaasɨta	カーハヌ kaahanu	カーヒ/カイ ka(a)(h)i
aarah	洗う	アーラフ/ アーラウ aara(ɸ)u	アーラスィタル aarasɨtaru	アーラハヌ aarahanu	アーライ aarai
abaah	落とす		アバースイタル abaasɨtaru		アバーヒ abaahi
utooh	落とす		ウトースィタ(ル) utoosɨta(ru)	ウトーハヌ utoohanu	ウトーヒ/ ウトーイ utoo(h)i
ndah	出す	ンダフ ndaɸu		ンダハヌ ndahanu	ンダイ ndai

この活用グループは、八重山語石垣方言では s 語幹となるが、小浜方言ではその s が h

となりながら、過去形 1 だけで s として残っている。この現象は、宮良方言でも観察され、おそらく宮良方言が小浜方言の影響を受けてきたところであろう。現在形では h が u の前で ϕ になるのは、音韻上の一般的な変化である。h が場合によって抜けることもあり、例えば「落とす」の連用形は「ウトーヒ」(utoohi) とも「ウトーイ」(utooi) とも言えるようである。このグループの中には、他の動詞の使役形と考えられるものがあり、例えば i 語幹動詞 abai (枝から離れて落ちるという意味) の使役語幹 abaah (枝から離して落とす) がそうである。また、八重山語他方言では、「洗う」は a 語幹の aara のようなものとなるが、小浜方言ではその動詞が h/s 語幹グループに入っているようである。

3.5 s 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
s 語幹					
k̄s	切る	クイス	クイスイタル	クィサヌ	キシ
		k̄isu	k̄is̄itaru	k̄isanu	k̄iji
k̄s	着る	クイス	クイスイタル	クィサヌ	キシ
		k̄isu	k̄is̄itaru	k̄isanu	k̄iji

s 語幹動詞は、これまでの調査では以上の 2 つの動詞だけであり、s/h 語幹動詞とは違って、常に s となっているようである。この 2 つの動詞は発音上では同じようであり、いずれにしても子音と子音の間の母音の無声化が強いため、その発音を正確に確かめるのが難しい。しかし、以上で表記しているように、語幹の s の前の中舌母音 i が連用形では i となっているように聞こえる。

3.6 r 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
r 語幹					
h̄ar/ p̄ar	行く	ハル	ハッタ(ル)/		ハリ
		h̄aru	パッタ(ル) h̄atta(ru) / p̄atta(ru)		h̄ari
waar	いらっしゃる	ワール(ン) waaru(n)	ワ(一)ツタル wa(a)ttaru	ワーラヌ waaranu	ワーリ waari
t̄ur	とる	トゥル t̄uru	トゥツタル t̄uttaru / tuttaru		トゥリ t̄uri
k̄ir	蹴る	キル	キツタル	キラヌ	キリ
		k̄iru	k̄ittaru	k̄iranu	k̄iri

		現在	過去 1	現在否定	連用
φ _y r	掘る	フル(ン)	フッタ	フラヌ	フリ
		φ _y ru(n)	φ _y tta	φ _y ranu	φ _y ri
ir	もらう		イッタル	イラヌ	イリ
			ittaru	iranu	iri
bir	座る	ビル	ビット	ビラヌ	ビリ
		biru	bi(t)ta	biranu	biri

このグループは、過去形 1 の音便化が生じて、日本語の r 語幹と同じようなパターンを示す。

3.7 m 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
m 語幹					
num	飲む	ヌム	ヌンタ	ヌマヌ	ヌミ
		numu	nunta	numanu	numi
oom	熟する			オーマヌ	オーミ
				oomanu	oomi
φ _u mm	縛る		フンタ	フンマヌ	フンミ
			φ _u nta	φ _u mmanu	φ _u mmi

このグループは、過去形 1 では m が n となる音便化が生じる。また、φ_umm が 2 つの鼻音子音で終わっているが、過去形ではその一つが消える。

3.8 n/m 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
n/m 語幹					
φ _y n /	履く			フマヌ	フニ
				φ _y manu	φ _y ni

このグループは、これまでの調査では一つの動詞だけであり、現在形と過去形 1 は未確認であるが、現在否定形と連用形を比べると、それぞれの語幹が m と n で終わり、上で紹介した m 語幹動詞のパターンと異なるようである。この動詞の他の活用形は今後の研究で要確認である。

3.9 i 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
i 語幹					
uri	降りる	ウリル	ウリタ(ル)	ウルヌ	ウリ
		uriru	urita(ru)	urunu	uri
uti	落ちる	ウティル		ウトウヌ	ウティ
		utiru		utunu	uti
tumi	探す		トゥミタル tumitaru		
pinki	逃げる		ピンキタ(ル) pinkita(ru)		ピンキ pinkii
ʃiti	捨てる		シティタル ʃititaru	ストウヌ sʉtunu	
phi	くれる	フィール	フィ(ー)タル	フヌ	フィー
		φiru	φi(i)taru	φunu	φii
baki	分ける		バキタル bakitaru		
ʃintʃimi	片付ける	シンチミル	シンチミタル		
		ʃintʃimiru	ʃintʃimitaru		
uki	起きる	ウキル	ウキタ(ル)	ウクヌ	ウキ
		ukiru	ukita(ru)	ukunu	uki
bii	酔う		ビータル biitaru	ビョーヌ byoonu	ビー bii
abai	落ちる	アバイル	アバイタル	アバウヌ/ アバーヌ	
		abairu	abaitaru	abaunu	
				abaanu	
mi	見る	ミル	ミ(ッ)タル	ミラヌ	
		miru	mi(t)taru	miranu	

このグループの一番大きな特徴は、否定形である。他のグループでは現在否定形は基本的に動詞の語幹に a をつけた上でさらに nu をつけることによって作られるが、i 語幹動詞は a の代わりに u が付く。この特徴は、八重山語の他方言でも観察される。このグループの中で例外的に見えるのが、「見る」であり、その否定形が「ミラヌ」(miranu) のようである。よって、この動詞を不規則動詞として扱うべきなのかもしれない。また、「酔う」を意味する動詞の語幹 bii が長母音で終わり、その否定形が「ビョーヌ」となり、他の動詞とは形が違う。abai (枝から離れて落ちる) の否定形は、「アバウヌ」(abaunu) も「アバーヌ」(abaanu) も両方観察されている。おそらく、長母音の ii で終わっている語幹や、ai のように 2 つの母音で終わっている語幹の活用形がこのグループの他の語幹とは違い、それに

向けた今後の研究が必要である。

3.10 u 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
u 語幹					
ku	漕ぐ	クー/コー	コータ	コーヌ	クイ
		kuu / koo	koota	koonu	kui
φu	降る	フォー(ン)	フォータ /	フォーヌ/	ファイ
		φoo(n)	フ(ッ)タ	ファヌ	φui
			φoota /	φoonu /	
			φu(t)ta	φanu	
φu	閉じる		フォータル	フォーヌ	ファイ
			φootaru	φoonu	φui

このグループの活用形は、動詞によって少し揺れる傾向があるようである。「漕ぐ」の語幹が ku であると思われるが、その現在形は「クー」(kuu) としても「コー」(koo) としても現れるようである。おそらく、予測される形「クー」が高母音の長母音となり、傾向としては高母音が半狭母音として発音される傾向があり、ここでは長母音 kuu から半狭母音 koo となったものであろう。「降る」の現在形「フォー」(φoo) も同様である。過去形 1 でもこのような揺れがある。否定形では、基本的に oo となり、コーヌ koonu (買わない)・フォーヌ φoonu (降らない)・フォーヌ φoonu (閉じない) のような形となる。しかし「降らない」は「フォーヌ」の他に「ファヌ」という形も観察されて、この形は予測外である。この形は、おそらく次に紹介する a 語幹グループとの間の揺れによる形であると思われる。

3.11 a 語幹動詞

		現在	過去 1	現在否定	連用
a 語幹					
φa	食べる	フオーン	フオータ(ル)	フアーヌ	ファイ
		φoon	φoota(ru)	φaanu	φai
ka	買う	カウ	カウタ	カーヌ	カイ
		kau	kauta	kaanu	kai

このグループの動詞は、「フォー」(φoo) のように母音融合が生じるものと「カウ」(kau) (買う) のように生じないものがある。現在否定形と連用形を見れば、これらの語幹が両方 a で終わっていることがわかる。しかし、現在形と過去形 1 では、その活用形の現れ方が違う。前者の現在形がフオーン φoon で、過去形 1 がフオータ φoota となるのに対し、後者の現在形がカウ kau で、過去形 1 がカウタ kauta となる。このような対立は、八重山語の他方言でも観察される (例えば、石垣方言や宮良方言でも見られる)。

3.1.2 その他（不規則動詞）

		現在	過去 1	現在否定	連用
不規則語幹					
k	来る	クー	クィタ(ル)		キー
		kuu	kʷita(ru)		kii

不規則動詞には、これまでの調査では「来る」が確認されている。この他に以上で説明したように「見る」も不規則動詞として扱うべきなのかもしれない。

4 まとめと今後の課題

本報告では、これまでの調査で確認できた主な動詞の活用形を紹介し、また活用グループ（語幹グループ）の特徴も簡単にまとめた。今後の研究では、まだ確認できていない動詞の活用形を確認し、対象とする動詞の数も増やすべきである。また、以上で紹介した活用形の細かい用法を把握するために、聞き取り調査を続けながら、自然談話の中でこれらの形がどのように使われるかを観察しなければならない。

また、本報告では扱っていない形もあり、今後の研究でそれらを明確にしてまとめる必要がある。特に必要となるのは、節と節をつなげるために使われる「仮定形」「確定形」などである。本報告では、節と節をつなげるために使われるものとして「連用形」と「接続形」を紹介したが、これ以外の形は今後の研究で報告したい。また、連用形が伴う様々な助動詞の詳細も、今後の機会でも報告したい。

参考文献

- ・ 記念誌編集委員会（編）（2010）『小浜中学校創立六十周年記念誌・ふるさとの味・しまくとぅば』、小浜中学校創立六十周年事業期成会。
- ・ 福田晃（編）（1984）『竹富島・小浜島の昔話：沖縄県八重山郡竹富町』、南東昔話叢書第9号、同朋舎出版。
- ・ 仲原穰（2004）「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学』、第16号、pp.259～287、沖縄県立芸術大学附属研究紀要。
- ・ 中川奈津子・タイラーラウ・田窪行則（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」『琉球諸語 記述文法 I』（狩俣繁久（Ed.））、pp.1-21。
- ・ 鈴木重幸（研究代表）（2001）『石垣方言の動詞のアスペクトとテンス(中間報告)：琉球八重山方言の動詞の研究』、文部省科学研究費補助金研究成果報告書、科研費課題番号11610438。